


『骨単』 原島 広至 氏に聞く

2018 - 02 - 15 取材：TAKAHASHI

歴史・サイエンスライター
エディトリアル・デザイナー

原島 広至 氏
HARASHIMA Hiroshi



サイエンス系の著書に『骨単 一語源から覚える解剖学英単語集 [骨編]』『肉単』『脳単』『臓単』『骨単MAP&3D』『生薬単 一語源から覚える植物学・生薬学名単語集』『ツボ単』『骨肉腱え問』『3D調る肉単』（現在、解剖学シリーズの累計印刷部数は60万部以上）。解剖学シリーズは韓国語版及び中国語版（簡体字）が発売中。ツボ単は中国語版（繁体字）が既刊。（以上、エヌ・ティー・エス、丸善雄松堂）。

歴史系の著書に『東京今昔散歩』『横浜今昔散歩』『大阪今昔散歩』『神戸今昔散歩』『スカイツリー今昔散歩』『百人一首今昔散歩』『名古屋今昔散歩』『広島今昔散歩』『ワイド版 東京今昔散歩』『ワイド版 横浜今昔散歩』（現在、今昔散歩シリーズの累計印刷部数は26万部以上。『+ - x ÷ のはじまり』（以上、KADOKAWA）。

☞ [NTS 解剖学シリーズへ](#)（外部サイト）

☞ [KADOKAWA 原島広至著書へ](#)（外部サイト）

Part 1 幼稚園～中学生時代と「解剖学」

——最初に解剖学に興味を持ったのはいつ頃からですか？

私の記憶に残っている範囲で、一番最初に解剖学というか人体の仕組みに興味を抱いたきっかけは、**幼稚園の頃**に手にした学研の図鑑『**人とからだ**』という本でした。終始図鑑を眺めて悦に入っているような子供でしたので、私の母は幼稚園から、学研の図鑑シリーズを数ヶ月に一冊ずつ買ってくれました。動物、昆虫、鳥、魚、植物、人体、宇宙、乗り物などなど、かなりの数が次第に揃いましたが、本の背が壊れてボロボロになるまで読んだのは、『人とからだ』と『昆虫』でした。本の壊れ方が私の興味の指標でした。

——幼稚園の頃が最初ですか。子供ごろにどんな点が印象に残ったのですか？

この図鑑の肝臓のイラストでは、肝臓に入って行く門脈が紫色の太い血管として描かれ、赤い動脈や青い静脈と共に肝門を入り、肝小葉へと分岐して行く図が掲載されていました。このイメージがとても印象的だったため、私は幼稚園の頃には、砂場で同年代の子供たちと遊んでいる時に、「**人間の血管には動脈と静脈と門脈があるんだ**」と力説していた記憶が今でも脳裏に残っています。

——その後もずっと人体に興味を持ち続けたのですか？

いや、小学生から中学生のはじめの頃は、もっぱら**天文**に興味を持ち、夜中に田んぼの

真ん中のあぜ道にブルーシートを敷いて、夜な夜な流星の数を数えるような少年でした。

その頃、**昆虫**もよく捕まえていました。家の前にはイチジクの木があったため、キボシカミキリがよく見つかりました。ただし、昆虫に興味があるといっても、標本を作ることや昆虫の種類を覚えて昆虫博士になるという方向ではなく、むしろ、**捕まえた昆虫をいかに精密に描けるか**ということに関心が向いていました。これらは中学1年生頃に描いた絵の一部です。



——その後どんなことに興味を持ったのですか？

中学時代に入ると、再び**人体**に興味を持ち、特に、どんな仕組みで意識というものが生じるのかを知りたくて**脳**に強い興味を持ちました。地元の図書館や学校の図書館にあった脳に関する本を片っ端から読み、**解剖学書**を眺めていました。なかなかこれに関してはは同じ興味を持つ友人はまったくいませんでしたが……。この経験が、何十年も後に**自分で解剖学書を書く発端**になるとは、その時には全く想像もしていませんでした。

Part 2 高校生時代と「言語学」

——ところで話は変わりますが、「骨単」シリーズは語源の説明が面白いですね。どんなきっかけで言語に興味を持ちましたか？

中学1年生の頃、クラシック音楽が好きで、ベートーベンの第九の歓喜の歌を歌いたくて**ドイツ語**を少しだけかじりました。これは長続きせず、今度は聖書を原書で読みたいと思い、**ギリシャ語**、**ヘブライ語**、それに**ラテン語**も独学し始めました。次に、ラテン語が歴史の進行と共に変化してゆくことに興味を持ち、**スペイン語**をまたちょっとだけかじりました。古代の中東の歴史に興味を持ち、とりわけ古代エジプトの**ヒエログリフ**に美的な観点からも関心をそそられ**古代エジプト語**に手を出し、**楔形文字**の難解な碑文が読みたくなって古代バビロニアの**シュメール語**や**アッカド語**を学びました。こうして、興味の赴くままにあらゆる言語を少しずつ、つまみ食いするのが趣味の一つとなりました。

——「骨単」の語源解説にそのあたりが役立っているようですね。

結果としてそうになりましたね。

随分昔の話ですが、高校時代、学校からの帰宅途中の1時間を費やして早稲田の古本屋街の店頭安売りをチェックして歩くのが私の日課でした。ある日、古本屋の店先に置かれていた700円という格安のClementeの解剖学図譜を衝動買いしました。

その本は全て英語で書かれていたのですが、中を見て、

『deltoid ? デルタ型、三角形、ということは三角筋か……。biceps、bi-は「2つ」で、cepsは「頭」を意味するギリシャ語のケファレーあたりが元か。すると二頭筋ということか……』

といった調子に、初めて目にしたはずの解剖学英語の多くがすんなりと理解できたのです。その時が、まさに私の脳内に「骨単」の構想の種がまかれた瞬間だったといえます。



Part 3 最近の興味「3D化」

——そういえば、「骨単」は文章だけでなくイラストもご自分でお描きになったんですよね。

はい、そうです。実際のところ、解剖図を描きたくて骨単シリーズを書いたといっても過言ではありません。

中学時代に脳の本を読み漁っていた話をしましたが、実は、その頃も見ているだけでなく、脳の絵を描いて和名と英語名を引き出し線を出して記入し、解剖図譜を自作してました。思えば、今と子供の頃では、やっていることに大して進歩がないようです(笑)。

その頃、脳の絵を描いて「なかなか脳の立体的な形状がうまく表現できない……」と、もどかしさを感じていました。そこで、試みとして脳の矢状断、水平断、前頭断を厚紙に実物大で描いて切り抜き、自作簡易ペーパークラフトを制作してみました。しかし、これでもまだ納得できません。次に、脳の5mmごとの水平断の画像を掲載している本を元にして、5mm厚の発泡スチロールを実物大でその形に沿って切っては重ねて接着し、最後に段差をヤスリで滑らかにして塗料で着色してみました。内部の切り抜いた断片の集積に

よって**基底核**や**辺縁系**、**海馬**などの姿が現われ、それを手にできた時の感激はひとしおでした。

——模型作りも趣味なんですね。

小学校低学年の頃はダイヤブロックに、小学校高学年になるとお城や戦艦のプラモデルにはまっていました。なぜか小学校の頃は戦艦大和のプラモデルを大きさ違いで3つも作り、その戦艦大和の艦首に穴を開けて加工して、宇宙戦艦ヤマトへの改良を試みたりしました。

やがて出来合いのものでは満足できなくなり、色々と自作模型を作り始めました。**丸善のHGS分子構造模型**が欲しかったのですが値段が高くて買えず、紙粘土を丸めて原子を作って色付けし、二酸化炭素やブドウ糖などの**分子の空間充填モデル**をいくつも作っていました。アミノ酸のL型とD型を作り比べて決してどの方向に向けても同じにはならないことを確認して一人で悦に入っていたので、少しばかりマニアックな小学生だったかもしれません。後には、**グルーガン**を駆使して**神経細胞**を作ったり、お湯で柔らかくなるプラスチックを使って**毛細血管の細胞**と**赤血球**を作ったりもしていました。

——そして、お仕事でも模型を作っていたとか？

父が建築設計をしていたため、そこで働くようになり、建築模型も時々作っていました。また**3D-CAD**が出始めた頃で、建物の完成予想図を三次元ソフトや画像加工ソフトを使って描き始めました。建築のパース図に人物の点描を加えようと思い、**Poser**というソフトを入手したのですが、そのソフトを使うと人間の骨格を動かして様々なポーズをとらせることができたため、**踊るガイコツCG**を余興で作ったりもしました（建築パースには使い道が全くなかったのですが……）。

30歳を過ぎた頃、本のデザインを生業とするようになったのですが、昔の解剖学用語のギリシャ語の語源の興味深さ、そして今携わっている本のデザイン、そしてガイコツの図、これら全てが結び付けば面白い本の企画になると思い立ち、**架空の「骨単」のカバーをデザイン**したのが、株式会社エヌ・ティー・エスの編集者と吉田社長の目に留まり、骨単の発行へと結びつきました。

——その後、模型作りの方はどうなりましたか？

3Dプリンタが世に出た時には、真っ先に目をつけていました。出版社のエヌ・ティー・エスに3Dプリンタを買うように勧めたりしましたが、少し時期尚早だったかもしれません。

その後、**3Dペン**が登場した時、これは医学教育に使えると思い立ち、色々と試作を試みました。下の図は、昨年末、また今年の1月に開催された**3Dペンを用いた解剖学講座**のチラシです。自分で頭蓋骨模型に3Dペンを用いて筋肉を描けば、どこが起始で停止か

がすぐに頭に入ります。また神経や血管を自分で描けば、**神経や血管が頭蓋骨のどの孔を
通ってどこに至るのか**、複雑な神経の走行も容易に立体的に把握できるようになります。
いずれ、3Dペンを用いた解剖学学習法が世の中のスタンダードになる時代が来るように
願っています。

人体の構造は非常に入り組んでおり、立体的な構造、また互いの臓器の位置関係を把握
しなければ、真の理解には達しません。そこを分かりやすく学習できないかと試みたのが
『**骨単 MAP&3D**』や『**3D 踊る肉単**』でした。今後もさらに、さまざまな形で解剖学の
模型化・三次元的視覚化ができればと願っています。



原島様との出会いは、語源に学ぶ解剖学用語集「骨単」の表紙をみて発刊を即決した2003年に遡る。解剖学、言語学、3D知識に固有な美意識と底なしの好奇心が織成す原島ワールドは専門家も一目置くユニークな視点に彩られた専門世界でもある。



彼の本が例外なくヒットする理由は、「ニーズが彼の心から生まれるからではないか?」「彼の心とはそこからある種の社会が沸き起こりつつ現場なのではないか?」と折に触れ思うことがある。
出会いから15年が経つがまだまだ彼の魅力を掘り尽くせないでいる。